

大友宗麟は切支丹か

増村隆也

目次

- 一、外国人の渡来と切支丹の伝来
- 二、神社仏閣に対して
  - イ、寺院の建立
  - ロ、寺社に寄進に関する文献
  - ハ、安堵に関する文献
- 三、其の他に關する文献
  - ホ、剃髪し宗麟となる
  - ヘ、神社仏閣の破却焼亡
- 四、宗麟の洗礼以後
- 五、宗麟の臨終、葬儀と墓

## 一、外国人の渡来と切支丹の伝来

天文八年（一五三九）ポルトガル船が府内浦に来て鉄砲を献じ天主教を説いたのが天主教の初めと思われ、次で天文十一年（一五四二）ポルトガル人、フランシスコが神宮寺浦に来て珍奇を献じ在市を乞い、鳥獸及び天主教を伝え、次で天文十二年（一五四三）ポルトガル人、メンデス・ピントが臼杵に上陸し府内に行き鉄砲を献じ、天文十四年（一五四五）シヨルジ・デ・フアリヤの一行がジャンクに乗つて府内に来て、天文十八年（一五四九）には西洋船一艘が臼杵浦に来て天主教を拡め（外志稿）、天文十九年（一五五〇）ピントが第二回府内に来た。このピントは前後五回豊後に来ているが、この後に来たのは天文二十年・弘治二年・永祿九年である。弘治二年の時はピントは印度総督の使であつた。

天文二十年（一五五一）には宣教師フランシスコ・ザビエルが山口から豊後に来て大友義鎮に遭い、この日ポルトガル船に乗つて印度に歸つた。史料総覧によるとこのザビエルの来訪に天主教の布教が許されたのであつた。この布教の許された事により府内はヤソ教の根拠地となり、この宗教に帰依する者多く府内と臼杵に切支丹寺院が建てられ、義鎮は宣教師に住宅を供し学校・病院・孤児院を建てたと云う。この年南蛮の商会の主人が石火矢と云う大筒二挺を献上した、大きい方の筒の直径は四寸あつたと云うが、これが天正十四年の戦に使つた太砲国崩しであつたかどうかは断定しがたい。

天文二十一年（一五五二）ベルタザール・カゴが山口より府内に来て義鎮に会い（史料総覧）弘治元年（一五五五）に於ける府内の切支丹信者は千五百人であつたと云う。

弘治二年（一五五六）トルレスが山口から府内に来た、義鎮はトルレスに家を給し引き止め、トルレスに病院を与え、又ポルトガル人、ルイス・アルメイダは府内と臼杵にも病院を建てたと云う。弘治三年（一五五七）二月と永祿五年（一五六二）の二月義鎮はポルトガル国王に書を呈した。

永祿八年（一五六五）臼杵に天主堂が建立されピント外四名が臼杵に来た、義鎮は非常に歓迎し帰国に際し印度国王に贈物

を托した。永祿十年（一五六七）九月と永祿十一年（一五六八）八月にマカオに滞在中の司教カルネイロに書を呈した、又永祿十一年イルマン（伊留滿）ギルエルトは臼杵に常駐した有名なカブラルの豊後に来たのは元龜元年（一五七〇）であつた。

## 二、神社仏閣に対して

大友義鎮は初めから切支丹信者ではなかつた、十九才の時家督を相続してからの義鎮は、神仏に対して熱烈な尊崇、信仰を持つていた、これを項を分けて見ると

### (1) 寺院の建立

弘治三年（一五五七）当時豊後に来ていた徹岫国師について禪の話を聞き、師の為に京都紫野大徳寺に瑞峰院を建て住わせ臼杵の諏訪明神の側に寿林寺を建立して京都大徳寺から怡雲（いいうん）和尚を迎えて禪を修めた、怡雲和尚は二年程してから京都に帰つたが、二年後の永祿二年（一五五九）京都から怡雲和尚を再び迎えて文寿寺を建てて居らした、次で永祿五年（一五六二）五月一日自らも怡雲和尚から薙髮受戒して休庵宗麟居士と号し、徹岫国師の為に京都紫野大徳寺に建てた瑞峰院の瑞峰を取つて自分の法名とした、宗麟の戒名が瑞峰院と云うのはこの為である。（後述）

永祿五年（一五六二）西方寺（大橋寺）祐範上人は大友宗麟の夫人が深く帰依する所であつた、宗麟は祐範上人の為に西方寺を森島に建設し、参拝者の便を計り天長橋を架設した、世人はこの橋から大橋寺と呼び遂に大橋寺と云うのが寺号となつた。宗麟夫人は永祿七年（一五六四）七月死去し大橋寺に葬むつた、宗麟は夫人の菩提のために更に臼杵の寺浦に宝岸寺を建てた。

宗麟の建てた寺は以上五ヶ寺であるが、三ヶ寺は現在廃寺となり、残つてゐるのは京都の瑞峰院と臼杵の大橋寺だけである。寿林寺は後に述べる親家を任職として住わせる宗麟の腹であつたから、規模も相当なものであつたと云う。

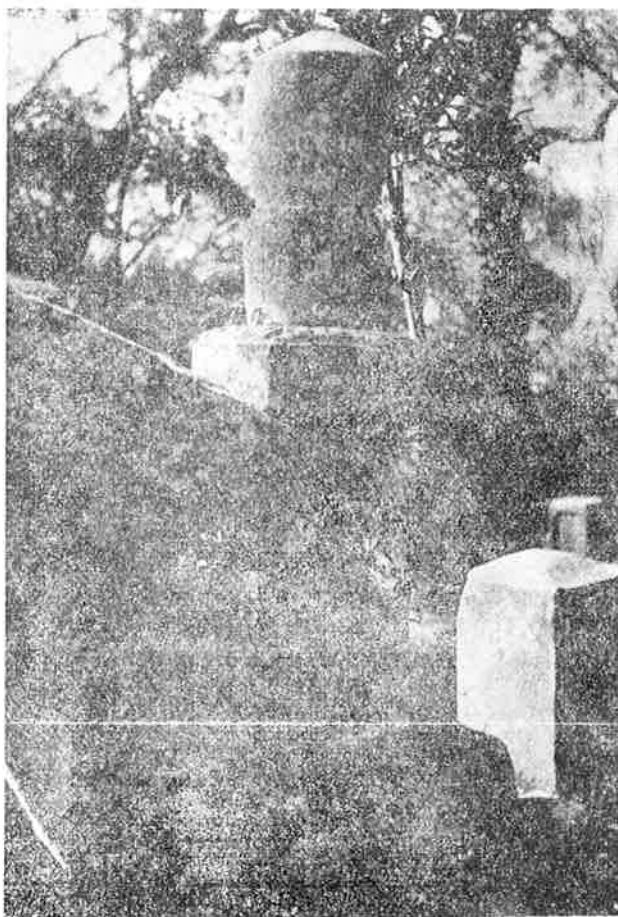
(ロ) 寺社に寄進に関する文献

天文十九年（一五五〇）六月二十八日上津八幡に立願の為小平田五反を寄進す。（大野文書）

天文二十年（一五五二）六月二十三日肥後国藤崎八幡に同国宮内庄等の地を寄進す。（史料総覧）

天文二十二年（一五五三）六月紀伊金剛峯寺西生院に豊後大分郡の地を寄進す。（西生院文書）

天文二十三年（一五五四）十一月三日紀伊金剛峯寺西生院勧進僧与阿をして豊後国に下向し領民の宿坊を開院建立する資を募集せしむ。



旧杵大橋寺にある大友宗麟の夫人の墓

む。（西生院文書）

永禄二年（一五五九）七月三日豊後大原八幡に竹田の地を寄進す。（橋本文書）

永禄五年（一五六二）二月二十一日大原八幡に若宮殿修理所を寄進す。（橋本文書）

元龜三年（一五七二）三月賀来社祠官をして明年大神宮宝会の会の資金を催促せしむ。（大友家文書）

（大友家文書）

イ) 安堵に関する文献

天文二十一年（一五五二）三月宗育をして肥後の広福寺住持等を安堵せしむ。（広福寺文書）

天文二十一年（一五五二）元甫をして肥後の正観寺住持職を安堵せしむ。（正観寺文書）

弘治三年（一五五七）三月七日旧により豊後東中坊をして禅福寺及び円通寺を管掌せしめその点役を免す。（豊後国諸家古文書）

文書

弘治元年より永祿五年（一五五五—一五六二）の間に円寿寺に寺領安堵を与えた。（花押より推定、円寿寺文書）

永祿二年（一五五九）九月十八日宮崎八幡宮司秦弘重をして大宮寺領那珂郡の地を安堵せしむ。（宮崎要記）

永祿五年（一五六二）五月大原八幡をして若宮殿修理料田嶋の地を安堵せしむ。（橋本文書）

弘治元年より永祿五年（一五五五—一五六二）迄円通寺に寺領安堵せしむ。（円通寺文書）

永祿七年（一五六四）永詮をして肥後の大輪寺職を安堵せしむ。（大友家文書）

永祿八年（一五六五）宮崎宮をして豊前筑前に於ける宮領を安堵せしむ。宮崎宮文書）

永祿十年（一五六七）宗像社大宮司宗像氏貞の忠を賞し同社領を安堵せしむ。（宗像神社文書）

（二）その他に関する文献

天文二十三年（一五五四）三月毛利房広の宮崎宮領の諸役を果し、同宮仏華寺領を押妨する事を停止せしむ。（田村文書）

永祿三年（一五六〇）十二月老松社領の地を守護不入とす。（歴世古文書）

永祿九年（一五六六）五月二十八日豊前求菩提山衆徒の離山を停め速かに帰山せしむ。（求菩提山文書）

永祿十年（一五六七）十一月戸次鑑速等に命じて太宰府天満宮宮司大鳥居某をして同社家中高橋鑑種に同意する者の交名を

注進せしむ。（大鳥居文書）

元龜元年（一五七〇）田原紹忍は筑後玉垂社田楽小路の禁制を解く。（梅津文書）

永祿五年（一五六二）十月毛利の兵を破るため守佐宮に戦勝を祈願す。（立花文書）

(丙) 剃髪し宗麟となる

永祿五年（一五六二）五月義鎮丹生島に移り剃髪して宗麟と号した。（大友系図、西治記）これに関して歴代鎮西要略・豊

府紀聞にはこれを永祿六年（一五六〇）十二月とし、軍記略には永祿八年としている、軍記略には義鎮心おごり政治をなまけ女色にふけり、老臣等これを諫め丹生島に新館を建て義鎮これに移り、剃髪して宗麟と号し法名を瑞峯と称す、一族家老三十余人同時に剃髪すと記している。義鎮が宗麟と号したのは永祿五年五月一日が正しいと思われ、更に元龜二年（一五七一）には宗悦に参禅している。（大友興廢記）

(丁) 神社仏閣の破却焼亡

斯く見ると宗麟は在来の宗教に厚意を示し尊崇したとしか取れないが、決してそうではなかった、反面切支丹が伝来して来ると切支丹に厚意を示し、むしろこれを保護し理由のないのに神社を焼き、攻撃を加え或は敵を攻めるために敵の拠る杜寺を焼いた。

翻つて見ると天文二十一年（一五五二）ペルタザール・カゴが山口から府内に来て天文二十二年仏僧と激烈な宗論を闘わし事に始まる。

義鎮はこれより切支丹に帰依する意向を有したが、洗礼を受けると云う所迄は踏み切っていない、義鎮が踏み切つていなければ特大ニュースであつたのだが、そこまで帰依していなかつたと見る他はない。

文献によると永祿元年（一五五八）山森紹庵、吉弘藏助、橋本縫殿助の三人を神社仏閣を破却する役人に命じた。（九州軍

記、陰徳太記、——西治記には吉弘内蔵介、橋本正行の二人を記す）これは大変な事であつた、西治記に拠れば一日紹忍を召して切支丹の教義を聞いて云うには

「自分は頼朝の仕置に従つて仏神を漏仰するも不祥事ばかりが多い、依つて諸寺諸社を破却し、そのためには外道（ゲドウ）宗に依らねばならない」

と云い、更に仏家・僧坊・宗廟・神社を一々破却すべしとの命令あり、神社仏閣の破却政策と云う古今未曾有の罪惡を冒したと記しているがこれは全くの冤罪であると思われる。

然し根も葉もない冤罪であるとは云い切れない、例えば永祿十年（一五六七）森紀庵をして何も理由もないのに府内勢家の住吉社を焼かした例がある、それも森紀庵自ら神社を焼いて紀庵も数日後に病死している。世人は評して神罪なりと云つたが、これは理由のない神社の焼却であつたと云つてよい。

その他義鎮は数多の神社仏閣を焼いているが、それにはそれで相当の理由があつた。

永祿四年（一六五一）七月田原親賢（紹忍）をして宇佐宮を焼打ちにした、これは次の理由があつた、田原種義が敵の毛利に通じて香春嶽に籠つたので、宇佐大宮司公達に対して参陣を促したが、大宮司がこれに応じなかつた為である。（岡豊記、歴代鎮西要略）これは戦略上のものであつた。

永祿四年（一五六一）十一月寺社奉行奈多鑑基が宇佐大宮司到津公澄の館を焼き公澄を筑紫の山野村に殺した、これは私怨によるもので大友の関知する所ではなかつた。（到津家譜、到津文書）

永祿十二年（一五六九）田原紹忍は彦山を焼いた、これは毛利軍が立花城を退いて安芸に帰ると戸次、吉弘、白杵の三將は高橋鑑種を太宰府に攻めた、この時彦山の衆に出陣を促したが応じなかつたから、紹忍の兵は彦山に乱入して討ち数千の坊舎は兵火にかかつたのであつた。（歴代鎮西要略）これは戦略上の問題で宗教上の問題ではなかつた。

元龜元年（一五七〇）府内の万寿寺を焼いた、これは義鎮の近習工藤帯刀が罪を犯して白杵を逃れ、府内の万寿寺に潜伏し

ているのを義鎮が知り、交渉したが万寿寺が命に従わず、怒つて家臣橋本五右エ門、清田因幡に兵五千三百を従わせ万寿寺を焼き捨てたのであつた、これも宗教的目的ではなかつた。

又永祿八年（一五六五）田原親種が大友に叛いて高良山神社に籠ると宗麟は高良山神社を攻め、再び永祿十年（一五六七）田原鎮種が高良山に立籠ると高良山を遠攻めにした。

天正四年（一五七六）四月彦山を焼打ちにした、これは彦山の衆徒が近隣に暴威を振り加うるに秋月の反に内通し、暴徒取締りに就いて宗麟の命に従わなかつた為である。（西治記、豊筑乱記）

天正五年（一五七七）八月兵三万五千三百を連れて府内を出発した時に先ず戦場に向う門出に、由須原八幡宮に矢一筋奉れとの命令に足軽二、三百をして弓鉄砲をそろえて射かけ、又道悪しき所には神仏の尊像をしき、兵は尊像を踏んで通つた、これは宗麟の暴挙であつた。

### 三、宗麟の悩み

元龜元年（一五七〇）伴天連カブラルが来た、このカブラルの渡来は宗麟の信仰と在来の神仏に対するよりも、切支丹に対する信仰が力強くしみこみ信仰の動揺を来した。このカブラルの渡来により切支丹は著しく興隆し、元龜二年（一五七一）には豊後の切支丹信者は五千人を越えるに至つたが、宗麟は相変らず仏教を捨てられず大友興廢記によると前の文献で述べた通り宗悦と参禅しているのを見ると、仏教は全く捨て去つた訳ではなかつた。

元龜三年（一五七二）ポルトガルの船が豊後に来てキリスト教を伝え、外交志稿によるとこの年宗麟は切支丹寺を自分の居城丹生島城の中に建築した。

天正四年（一五七六）夏ポルトガル人が豊後に来て大砲二門を宗麟に献上した。（外交志稿）これは吾国で初めてのもので宗麟は非常に喜びこれを丹生島城に備えつけ国崩しと称した。この国崩しが天正十四年薩摩の兵が臼杵城に攻め寄せた時宗麟



は丹生島城に籠り国崩しを使つて大勝を得たのであつた。この国崩しに就て紹忍が独特の雄弁を振つて、宗麟に洗礼を奨めた事は有名で、鉄砲と火薬を手に入れる事は当時外国人に接する宗麟の第一の目的であつた、それが大砲であつた、宗麟の喜び様は例え様もなかつた。この年臼杵市内に教会堂が建つた。

天正三年（一五七五）宗麟の第二子親家が洗礼を受けた、親家の受洗と共に今迄病人か貧困者ばかりが切支丹の信者であり一般に切支丹の信者は賤しめられていたが、宗麟の次子が洗礼を受けたとなると旧来の考え方は一掃され、従来は尊敬され、平民ばかりでなく、武士も吾も吾もと洗礼を受ける様になつた、老臣田原親賢の養子親虎もこれと時を同うして受洗を希望した。

親虎は宗麟の夫人の兄で、宗麟の総参謀である親賢が京都の有力な公卿の子を養子として迎えた者で、大友興麿記によると柳原氏の公達であつた。親虎は聡明で教養があり美少年であつた関係から、宗麟夫妻の寵愛を一身に集め宗麟はその娘と夫婦にする予定であつた、この親虎が切支丹になろうと云うのである、宗麟夫人及び親賢（紹忍）の反対は勿論で、紹忍は激怒して義絶すると共に禁錮し改宗を暗に陽に親虎に奨めた。然し親虎は改宗せず宗麟夫人及び紹忍の怒はその頂点に達した。然し宗麟はその子親家の時は初め臨濟宗寿林寺を建て、その住職に親家をしよう、そうすれば兄弟の家督争いも未然に防げるものと考えたからであつたが、親家が僧侶となる事を嫌い切支丹になろうとすると、強く反対する事もなく伴天連カブラルに就て洗礼を受けさし手前もあり、親虎の場合は養父紹忍が、十四才の親虎を連れて臼杵の会堂に行き、カブラル神父に入教させたといと申し出で、親虎の入信がきつかけとなつたのであつた。

かかる関係から裏面に於ては宣教師と親虎をかばい激励すると共に、表面に於ては夫人と重臣の反対で一種愴々な空氣に包まれ、宣教師等は屢々殉教を覚悟せねばならない緊迫感があり、引いては国内に動乱も起る恐れがあつて、宗麟の悩みは計り知るべからざるものがあつた。親賢（紹忍）宗麟夫人が遂に親虎の領地を奪つて義絶追放したのを宗麟は怒つて夫人を離縁し子親家の妻の母の迎えて正室とし、宗麟は遂に決心してカブラル神父によつて天正六年七月十四日洗礼を受けた、教名を天文

二十年（一五五一）豊後に来たフランシスコ・ザビエルにちなんでドン・フランシスコと云つた、これはザビエルの教を受けて二十七年目であつた。この頃臼杵市内にはノートルダム寺院が建つていた。

宗麟がこの長い間洗礼を受けなかつたのは第一に重臣の反対、第二に夫人の反対、第三に神社の反対によつて国内に動乱の起ることを警戒した事、第四に当時の家族制度に於ける一夫多妻制、特に彼の好色が戒律にもとり、彼が戒律を守るだけ決意が出来なかつた事、第五に悪人を殺すことと殺生禁断の戒律（政治と宗教）との矛盾、第六に当時の慣例により教済を得ようと以前から努力していたこと、これが解決しなかつた事が原因である様である。（日本西教史上）

#### 四、宗麟の洗礼以後

宗麟の洗礼を受けた事により臼杵は豊後のローマとなり、臼杵にはバードレ二人、イルマン六人、計八名が駐在する盛況を呈した、天正六年（一五七七）コレシヨの敷地が臼杵で与えられたが建築はなされなかつた様で、次で丹生島城内に礼拝堂が建てられた、それを文献を引用して見ると

「宮中に会堂を設け毎日弥撒を聞き、日曜日及び聖徒の祭日に際し城外の会堂に行かざる時は説教を聞けりと述べければ、世子大いに喜び明日直ちに大工を呼び御城内に小堂を設くべし、城は大ならず予が望む如き建築の餘地なきが、少くとも当分は予並に妃が毎日曜日弥撒及び説教を聞き得べし」（臼杵城内に礼拝堂を作る―耶穌会士日本通信、豊後篇下）

「バードレ、ルイス、フロイスの意見に従い礼拝を中止し代りに城内に設けた礼拝堂に於て長老及び副長老列席の上、オルガン伴奏にて弥撒を歌い若王並びに列席者皆非常に満足す」（臼杵城の礼拝堂に弥撒を行う―耶穌日本通信、豊後篇下）

「天正の比宗麟が清田石見守と田原近江守親賢を奉行とし丹生島に切支丹寺を建立す」（古本九州軍記、九州治乱記）

これ等は当時の模様を物語るものである。天正八年（一五七九）府内にコレシヨが建ち臼杵にノビシヤドが建てられた、ノビシヤド（修練所）と云うのは布教の實際に當る者の訓練所の事で、日本人六名、ポルトガル人六名が居た、更に臼杵にカサ

プロフェッサーと云う学院が建てられた。

宗麟が受洗するとその一族の者、家臣の者で洗礼を受ける者が続出した、この切支丹旋風は領内に起り大野郡野津市には宣教師の住宅が建てられ、野津市の切支丹信者は三千五百人を数うるに至つた。宗麟が受洗すると共に世子義統（よしむね）に譲り一意切支丹信者となり信仰の生活に入つた。

天正七年（一五七八）高良神社を攻めた、これは神社仏閣の破却焼亡と云う政策とは関係がなく、高良山神社が歴代鎮西要略に拠ると三池鎮実の乱にくみしたからで、戦争遂行上の問題であつた。又天正七年宇佐宮の社から田原紹忍を通して大友氏に対し鑑基、鎮基父子の暴挙を訴え宇佐宮の敗たいを歎きその再興を乞い、神社奉行の鎮基の職を免じて貰いたいと祈願した。これは其の職にある者の暴挙にくみ、前年の神社の焼亡が大友氏自身には全く関係がなかつた事が知られてくる。

天正八年（一五八〇）夏熊群山の東岸寺を焼打ちにした、これは田原親貫に一味して誅せられた田北紹鉄が東岸寺によつて抵抗したからである。（豊筑乱記）又天正九年（一五八一）正月彦山を焼打ちした、この時は寺院坊中で兵火に罹るもの數百戸で古来の經典・本尊・宝物・記録等悉く灰燼に歸した。これは志賀、一万田をして肥後を征せしめ、吉弘、臼杵をして筑後を征せしめた時彦山の參陣を促したが彦山がこれに応じなかつた為で（歴代鎮西要略）共に戦略上の問題であつた。

天正九年（一五八一）十二月十七日宗麟はポルトガル国王、ローマ法王、ヤソ会総長に書を送り、天正十年（一五八二）正月八日（陽曆二月二十一日）宗麟は姪の孫伊東祐益（マンシヨ）等を長崎から出発させローマに遣わした。マンシヨは有馬の一族キタ岩清エ門、大村の臣中浦原と共にローマに行き、天正十三年（一五八五）二月ローマ法王グレゴリー十三世に謁した。又天正十二年（一五八四）春植田玄佐をローマに遣わし法王に金銀・物品等を贈らせたが、残念な事に彼は彼地に病歿した。

（外交志稿、豊府紀聞）

天正十四年（一五八四）十二月薩摩の島津義久の兵は、宗麟のこもる臼杵丹生島城に攻め寄せた、宗麟は城に備えつけた困崩しを発射し敵を撃退したが、市内のノビシヤド、カサ・ブランカ、会堂・病院等は兵火にかかり一瞬にして灰燼に歸した。

これが原因になつたのであろうが、天正十五年（一五八七）五月二十三日宗麟は津久見に死んだ。（日本西教史）大友系図・豊陽志によると津久見ではなく臼杵城に死したと記している。

### 五、宗麟の臨終、葬儀と墓

日本西教史によると宗麟の臨終、葬儀の模様を次の如く記している。

大村純忠の死後十八日にして上帝は善良なるフランシスコを呼び招かれた。この王は薩摩の兵に領地を強奪せられ、キリスト寺院は焼滅せられ、十字架は打ち壊わされるのを見て大いに悲しみ、これが為に病にかゝり初めは普通の熱病であつたが、毒悪の大气の為に、益々発熱して平癒し難き状態となり、遂に一五八七年六月六日（天正五年五月一日）靈魂は上帝に奉遷された。

死期に臨み前年その退隱所の友人として選んだラギユナー師を呼び、総ての聖礼を受け、又病中は上帝のことより他は話すことを希望せず、恰も不毛の地に生活する如く、地上の事は全く望みを絶つていた。

この王は切支丹を信じ且つ人民をして切支丹に服従せしめた事により衆人の葬送を受け、豊後国その他近国の切支丹信者である諸侯、及び諸士は皆来てこの葬式に立會つた。

その屍は礼服を着せ、華麗に葬式を執行し、その柩は近親者に担がれ、大臣等は十字架の旗を持つて柩に接近し、大臣に続いて夫人（教名ジュリヤ）が主の先妻の生む所の子女等と共に進み、これ等貴き子女等は皆喪服に白い袴をつけ、又兵隊はこの行列を警護した、数多くの人民もその父の喪にあたる如く、その死を悼み行列についた。

靈柩は切支丹の寺院の中に運び込まれ、これを高い台の上に乗せ、数多の燈火をともし、宣教師が礼拝して日本の切支丹の人々も皆礼拝した。」

と記し、一五八八年二月二十日（天正十六年正月二十四日）伴天連ルイス・フロイスが有馬から耶蘇会総長に送つた書中に

宗麟の側近にいた伴天連ラグナが認めた誓翰からその要領を略記している。

「われらの善き誠の友であるフランシスコ王（宗麟）は多くの難苦を嘗め、特に豊後の破滅に遭つて長く白杵の城に籠つていた間に、大いに疲労衰弱した事を感じ、平素居住していた津久見に行くことに決したが、豊後全国を荒した病（伝染病）を避ける為急に出発する事が出来なかつた、王は津久見に着く数日前より熱を発していたが、到着後病勢一層加わり三日を経て（一五八七年六月十一日天正十五年五月六日）死した。

彼は帰依したのち常に清き生涯を送つたが、死に臨んで救を受くる兆候を示し、聖儀を授けられて大いにその罪を後悔し、デウスに対し、その上を望む能わざる信心を表した。彼は病中かつて家族および国について語つたことなく、デウス並びに魂に関する事のみ思い、予（ラグナ）に対しても屢々その魂のことを願うと言ひ、既に全く力尽くるに至つても、手を合せて主に祈り、その死する前、彼が心中に深く願つていた世子のキリシタンとなることを許し給うた御恵を謝し、遂に聖徒の如く死したが、彼はデウスの御意により永久の生命を享樂しているのであらうと思ふ。

予（ラグナ）は直ちにゴンサロ・レベロ及びジョアン・フランシスコの両伴天連を、そのレジデンシヤ（寺院）より招いた。当時豊後には他の伴天連または伊留満の居る者なく、みな山口にいたからである。時は夏で日本において最も降雨多き時であり、彼等の来るとは甚だ困難で、河水の増した時には馬と共に泳いで渡る程であつた為め、少なからず危険に瀕した。

われら伴天連三人（ラグナ、レベロ、フランシスコ）と、予と共にいた伊留満二人（ジョアン、ほか一人）と集り、甚だ莊嚴なる葬儀を行つた。伴天連、伊留満の不足は、この葬儀に参集した無数の人によつて補われた。当時世子は遠方に居り戦争に従事して居た為め、列席することができなかつたが、在國の殿および大身たちはみな参列し、執政並びに最も頭立つた殿たちが、甚だ立派に飾つた柩を肩に担ひ、その周囲には十字架の旗多数を立て、その後にはジュリヤ（未亡人）とその娘たち一同並に無数の人が随行した。棺台は甚だ立派なもので数段を備え、周囲には金を塗つた蠟燭が甚だ多数立てゝあつた。伊留満ジョアンは王の徳を称讃し、同國ならびに住民の帰依のため、または善政のため、王が絶えず尽したことに対し負う所の多いこ

とを述べて葬式の説教をなしたが、諸人みな感激し大いに満足した。墓所は王の分身に相当した立派なもので、諸人の涙と哀悼の中に埋葬した。

と書いてある。これによつて見れば葬儀も墓も切支丹式のものであつた事に間違いない。然し宗麟が死して百日も経たない内に、豊臣秀吉は九州征伐の帰途博多にて切支丹禁教令を出した、これにあわてた嗣子義統は再び仏教徒となり、宗麟の切支丹式の墓をこわし、仏僧に命じて仏式の墓を建て替えさせた。

豊府聞書に「天正十五年五月二十三日（一五八七年六月二十八日）宗麟臼杵丹生島城に卒す、義統家臣に命じて葬礼の事を調べ、その粧美善を尽さしむ。府内金貌山大智寺を以て大導師となし、国中の寺院調経し、国中の四民供奉し、葬礼は津久見赤河内の成森において成す、法諡瑞峯院殿休庵宗麟大禪定門。既にして靈屋を営み古塔を安んず。同年八月三日義統府内屋形において、大智寺をして宗麟の百日日仏寺を修せしむ」と書いてあるのは秀吉の禁教令を恐れて仏式により葬儀を営んだ様に見えるものと思われる。

法名は豊府聞書には瑞峯院殿休庵宗麟大禪定門となつており、大友史料及び現在ある墓碑には瑞峰院殿前羽次将兼左金吾休庵宗麟大居士と書いてあり、京都紫野大徳寺瑞峰院に伝わる宗麟の画像には瑞峯院殿瑞峯宗麟大居士となつている。瑞峯院に伝わる画像は天正十五年九月前大徳寺怡雲宗悦が讚したもので、これが正確な法名と思われる。

現在の墓は宗麟の家来の後裔、臼杵の人臼杵豊城が寛政年間（一七八九—一八〇〇）宗麟が死して二百年程の年月を経過し全く荒廃しているのを見るにみかねて建てたものである。宗麟の死亡年月に大友史料・大友系図・豊陽志には天正十五年五月二十三日となつてゐるが、耶蘇会側の記録では一五八八年六月六日（天正十五年五月一日）となつてゐる（ルイス・フロイスの報告には六月十一日）戦略上の関係で死を秘したものであらう。